

二〇〇二年一月一日

三〇年ぶりに唐十郎の戯曲ジョンシルバーを読む。片付かぬママに転がされていたブルーの本が気になったから。昨日正月元旦に読みだめしてやろうと思って買ってきた本の一冊は森村泰昌の空想主義的芸術家宣言だったのだが、読み流しているうちに唐十郎の演劇をフット思い出したのだ。森村泰昌の仕事は一部唐の仕事の再生産的な趣があるような気がする。

唐十郎は六〇年代の象徴の一つだった。その仕事の特性は例えば新聞の三面記事の小さな一コマを素材にして連鎖的に想像力を展開してみせることであつた。そのテント劇場内での演劇は不思議なオブジェクトを巧みに使い役者達に吐かせる言葉をさらに遠くへ飛ばすのが驚きでもあつた。机タンス人形リヤカー自転車鏡公衆便所さえも。言葉は常にモノに運ばれて遠くへ飛んだ。それが圧倒的な自身の空白不在の時代への入り口に立っていた若いらただしさをいやした。例えば二都物語などに暗示されていたような気もする政治的な言説は修辞にしかならなかつた。アジアへの何度かの遠征も詩的直観の域を出ることはなかつた。しかしその詩的直観は今振り返っても先鋭的なものだった。

森村泰昌のセルフポートレートも又、唐の小道具たちと同様に卑俗なモノの形式を取りたがっているように思う。芸術家が見るものであるという特権にあぐらをかいていると言つ常識の枠を彼は疑つ。見る、そして描くと言つ枠を外し、見られる者としての

芸術家という視点を彼は提示している。そのセルフポートレートの何がしかがかったの唐の状況劇場のスターであつた四谷シモンの記憶にあまりにも酷似しているのは面白い。四谷シモン、天性の女形おやまにして人形作り、シモンが森村泰昌の先行者であつたことは疑い様がない。森村のソフィステイケートされたセルフポートレートの手法は唐の六〇年代には異常と思われた観客へのアジテーション、挑発と良く良く考えるならば酷似しているではないか。唐のテントでは観客は時に水をぶっかけられ、突き飛ばされ、ツバを吐きかけられ、二ワトリを投げ込まれた。唐の観客への度を越えた乱暴振りは森村に於いては静かに抑制されてはいる。しかし、自分（芸術家）を見よという過激なメッセージは同根のものだろう。

私はここで森村が唐の縮小再生産なのだという事を言はんとしようとするのではない。そんな事を言つても私には何の得もない私の青春時代でもあつた六〇年代を少しばかり振り返つてみたいだけなのだ。これからの時代は著しく非六〇年代代であるが故に、六〇年代にあつた事、自分の出発の事自体も、極めて客観的に考えられるような気さえするのだ。六〇年代にあつた事を逐一思い起こす必要がある。

森村のセルフポートレートは当然の事ながら森村自身が過去の芸術作品に進入してゆく、過度に模倣してゆくという独自の方法に依っている。が彼も言うように独自であるという事によってセルフポートレートという一種の普遍性から外れてゆくという矛盾も持つ。ここで言う普遍性とは、誰でもが芸術家たり得るといふ広大な、際限のない普遍性のことである。自分を何かになぞらえる、つまり模倣させること自体を写真にして、それを表現行為にまで高めてしまう。この事自体は私が考え進めている建築表現に

おける開放系技術によるデザインに近いような気がする。

一月二日

コロッケの模倣芸をTVで見る。五木ひろしのモノマネであったが、それは五木ひろしであって五木ひろしを超えていた。あまたあるモノ真似とは違う次元にコロッケの一部の芸は突き進んでいる。五木ひろしの演歌はコロッケの芸、つまり表現においてはすでに素材でしかない。素材はデフォルメされ歪曲され引き延ばされて、別のモノになっている。ピカソの宮廷の女シリーズと同様に。TVをあなどってはいけない。どんな芸術も金が集中するところから生まれ易い。とすればTVと直結した表現芸術のスタイルがTVから生まれ出る可能性もあるだろう。コロッケという芸人もTVでしか生み出し得ない新しい芸能なのではあるまいか。モノ真似が本物よりも面白いのは何故か。本物には他の追隨を許さぬという強い排除の力が働くが、モノ真似にはそれがモトモト無い。それだけ自由なのかも知れない。それから、五木ひろしはズーツと五木ひろしを演じなければならぬが、コロッケはコロッケを演じなくても良いという事もあろう。二日間ほとんど家から出ずに暮した。夜風が強く吹く。

一月三日

午後、宮本邸プラン作成。少しはましな考えがまとまった。庭が余白の空間ではなくて、庭と建築が双方ポジティブに自在に混入している。早速ファックスで宮本さんに送る。星の子愛児園西側ドームの納まりのデザイン決める。愛されるモンスターになるかどうか、この部分にかかっている。森の学校の基本的な考えをまとめる。六日からカンボジアなのでスタッフに新しく仕事を割

り振らなくてはならない。みんな典型的な指示待ち人間だからな。聖徳寺デザイン指示書作る。

一月四日

九時三〇分地下で年始めの小ミーティング。スタジオボイス原稿。マイナスの作り方ムラタ有子書く。書いて面白かった。取材つてのは結局こちらが勉強してるんだよね。日経新聞原稿送る。春のワークショップのプログラムを決めなければならぬが、どうも切口によい方法が見つからない。講義+実習のスタイルから少し発展させたいのだが。

昨夜遅く見たNHKのアクターズスタジオのステイプン・スピルバーグ、インタビューは面白かった。

アメリカン・サクセスストーリーの典型を見るように考えさせられもした。スピルバーグの成功の素は単純で大柄なパッションとそれを支え得る人間性そのものにあることが良く理解できた。率直かつ正直な人柄が多分演技ではなく充二分にTVカメラの前に在るのだった。山田洋次の「フーテンの寅」との違いは、それにかけられる資本の総量の圧倒的なちがいもあるのだろうが、スピルバーグと比較すれば山田洋次は余りにも日本の障壁の多いインテリだ。スピルバーグはむしろ寅次郎の素なのだ。寅次郎から余計な、計算されたモノを取り外したところがスピルバーグの居る地点だ。日本映画が置かれている歯ぎしりしりしりとなるような地点が示されているような気もする。それと比較すれば建築家の世界はまだましな様な気がするな。しかし映画監督は興行収入がダイレクトにカウントされるけれども建築家にはそれが無い。しかし、いずれ建築家もその様なダイレクトで赤裸々なカウントの仕方がされるようになるだろう。